

令和8年2月4日（水）

文責・本プロジェクト企画統括（指導・運営を含む）

長崎県立長崎東高等学校

WWL 探究推進室長／三菱みらい育成財団教育プログラム担当

教諭 鳥居 正洋

本校では、「WWL (World Wide Learning)」および「三菱みらい育成財団」の教育プログラムの一環として、生徒が世界と向き合い、自ら問いを立て、社会とつながりながら学ぶ探究的な教育活動に取り組んでいる。

令和7年度（2025年度）は、こうした理念のもと、校内にとどまらない実践的・体験的な学びを数多く展開してきた。本校の探究学習は、

- 1 国際会議への参加によるグローバルな議論の場での対話と発信
- 2 探究全国大会への参加による成果の発表と全国水準での相互評価
- 3 国内外の探究スタディツアーを通じた現場体験による問いの深化

という三つの柱を相互に関連づけながら設計されている。

これらの取組は、生徒が学びを循環させながら思考を深め、主体的に社会課題と向き合う力を育成することを目的としている。

本報告書「Global Learning & Inquiry Report 2025」では、令和7年度に実施した、上記三つの柱の教育活動の中から、特に象徴的・代表的な取組を取り上げ、生徒自身の言葉による感想とあわせて紹介する。本校生徒が挑戦を通して成長していく姿、そして学びの過程で見せた思考と行動の軌跡を示すものである。

1 国際会議への参加によるグローバルな議論の場での対話と発信

(1) CIF (Critical Issues Forum)

①本事業の概要

令和7年3月26日（水）から4月1日（火）にかけて、アメリカ・カリフォルニア州モントレイにて開催された国際会議 CIF (Critical Issues Forum) に、高校2年7組の上戸龍之介が参加した。本校は、日本の公立高校として唯一の招聘校として本会議に参加した。

CIF は、ミドルベリー国際大学院 (Middlebury Institute of International Studies at Monterey) が主催する国際会議であり、批判的思考 (Critical Thinking) を基盤に、核軍縮・核不拡散といった国際的課題について高校生が研究発表と対話を行う場である。2025年度のテーマは、「80 Years of Struggle: Revitalizing Nuclear Disarmament and Nonproliferation through Cross-cultural Youth Engagement (被爆80年の闘い：異文化の若者の関与を通じた核軍縮と不拡散の活性化)」であり、アメリカ、日本、インド、パキスタンの4か国から計19校、約80名の高校生が参加した。

本会議では、各校による研究発表に加え、パネルディスカッションや少人数でのグループディスカッションが行われ、核兵器をめぐる課題について多角的な視点からの議論が展開された。基調講演では、アメリカ大統領トルーマンの孫である Clifton Truman Daniel 氏、ならびにジェームズ・マーティン不拡散研究センター (CNS) の Stephen Herzog 氏 から講演があり、核をめぐる歴史的・政治的背景について理解を深める機会となった。



各国生徒とディスカッション

上戸は、「Peace Message Communicated through Trees（樹木を通して伝える平和）」をテーマに、長崎・広島に現存する被爆樹木の分布や、被爆後の植生の回復過程をもとに研究発表を行った。長崎原爆資料館での調査や、筑波大学名誉教授・鈴木雅和先生との質疑を踏まえ、被爆樹木を「政治的立場や国家の枠組みを超えた、普遍的な平和の象徴」として位置づけ、国際的な平和発信への活用可能性を提案した。

この発表に対し、会場からは大きな反響があり、『学校優秀賞』を受賞した。講評では、アメリカ国務省の Charles T. Mahaffey 氏より、「被爆樹木の種が小さな波紋からやがて大きな波へと広がっていくように、平和構築もまた同様である」との評価が寄せられ、本校の研究が国際的文脈において高く評価された。

本会議を通じて上戸は、核や平和に対する考え方が国や歴史的背景によって大きく異なることを実感するとともに、異なる立場を理解し合いながら対話を重ねることの重要性を学んだ。本取組は、生徒が国際社会の一員として課題に向き合い、思考し、発信する力を育む貴重な機会となった。

②生徒の省察 「根拠」の重要性 高3 上戸 龍之介

CIF に参加し、国際社会における対立や分断の問題が、想像していた以上に複雑で現実的なものであることを実感しました。会議では、核兵器、紛争、経済格差、気候変動など、多様なテーマが同時に議論されており、一つの正解が存在しない中で、各国や立場の異なる参加者が自らの主張を論理的に展開していました。

特に印象に残ったのは、自分の意見を述べる際に、感情や理想だけでなく、データや前提条件を踏まえて説明する姿勢が求められていたことです。発言の重みや責任を強く感じ、自分自身の準備不足や思考の浅さを痛感する場面もありました。一方で、問い続ける姿勢そのものが評価される国際的な議論の場に、大きな刺激を受けました。

今回の経験を通して、国際問題を「遠い出来事」として捉えるのではなく、自分の学びや将来の選択と結びつけて考える必要性を強く感じました。今後は、知識を蓄えるだけでなく、根拠をもって意見を発信できる力を身につけていきたいです。CIF では、同じ「核」や「平和」というテーマであっても、国や文化、歴史的背景によって考え方が大きく異なることを実感しました。

③学びの成果

CIF への参加は、生徒にとって「国際問題を知る経験」にとどまらず、「国際社会で考え、語るとはどういうことか」を体感する学びとなった。多様な国・立場の高校生との議論を通して、価値観の違いや知識格差、前提条件の異なりが、対話の質に大きく影響することを実感できた点は、大きな成果である。

また、感情や理想論だけではなく、根拠に基づいて自らの考えを構築し、他者と共有する姿勢が強く求められる場であったことは、生徒にとって自身の課題を明確にする契機となった。CIF での経験は、国際的視野と批判的思考力を育てると同時に、今後の探究や進路選択へとつながる重要な学習の一步であったと評価できる。

(2) Nagasaki Peace-preneur Forum 2025

①本事業の概要

Nagasaki Peace-preneur Forum は被爆 80 年という節目の年に、長崎市で開催された国際的な若者向けフォーラムである。一般社団法人 One Young World 長崎協議会が主催し、世界各国・日本全国から若いリーダーたちが集い、「平和とイノベーション」について考え、学び、対話する場として実施された。

「Peace-preneur（ピースプレナー）」とは「平和起業家」という意味であり、平和を創造する未来リーダーを育成することを目的としており、課題解決のアイデアや具体的な行動につながる実践的な学びの場となった。

「分断と対話」を中心テーマに据え、政治的・社会的・経済的な分断が深まる現代社会において、異なる価値観や背景を持つ人々がどのように対話を設計し、未来に向けて協働していくかを探究した。

【開催概要】

- ・開催期間：令和7年5月16日～18日（前夜祭含む）
- ・会場：HAPPINESS ARENA／ベネックス長崎ブリックホール（長崎市）
- ・参加者：国内外の次世代リーダー約200名（英語中心）

【フォーラムの特徴】

・前夜祭、ネットワーキング

参加者同士の交流や歓迎スピーチを通して、多様な背景の若者が出会い、つながる機会が設けられた。

・講演、トークセッション

国連職員や著名なリーダー、社会起業家らが登壇し、スポーツを通じた平和、核兵器廃絶、DEI（多様性・公平性・包括性）、人道支援など多岐にわたる観点から講話や対話が行われた。

・ワークショップ、実践セッション

参加者自身がDEIの実践、平和的リーダーシップのあり方を体験するワークショップや協議を体験。



ホールで意見発表する生徒

②生徒の省察

・対話の重要性 高3 堤 ももか

被爆80年という節目の年に長崎ピースプレナーフォーラムへ参加し、「平和とは何か」を改めて自分の言葉で考える機会となりました。フォーラムでは、スポーツ、科学、福祉、デザインなど、平和と一見直接結びつかない分野で活動する人々の実践に触れ、平和は特別な理念ではなく、日常の行動や選択の積み重ねによって形づくられるものだと気づかされました。

特に印象に残ったのは、立場や価値観の異なる人同士が、意見の違いを否定するのではなく、対話を通して相手を理解しようとする姿勢です。自分自身も意見を発信する場面で、相手の背景や考えを想像しながら言葉を選ぶことの難しさと重要性を実感しました。

被爆地・長崎で学ぶ高校生として、平和を「知識」として知るだけで終わらせず、他者と向き合い続ける姿勢そのものが平和につながるのだという意識を、今後も持ち続けたいと強く感じました。

・自分の将来とどうつなげるか 高3 石橋 万里愛

長崎ピースプレナーフォーラムへの参加を通して、平和は過去の出来事を学ぶだけではなく、現在と未来に向けて行動することで初めて意味を持つものだと実感しました。国内外で平和活動に携わる人々の話から、国や文化の違いを越えて共通する課題が存在すること、そして一人ひとりの小さな行動が社会を動かす力になり得ることを学びました。

特に、若者が自ら課題を見つけ、社会に働きかけている姿に刺激を受け、自分も受け身で学ぶだけでなく、行動する側に立ちたいと感じました。フォーラム後には、自分の将来や進路と平和の問題をどのように結びつけられるのかを考えるようになり、学びの視点が大きく変化しました。

長崎で生まれ育った一人として、この経験を自分の中だけに留めるのではなく、学びを周囲に共有し、行動につなげていく責任があると感じています。

・DEIと平和 高3 小畑 千優楽

長崎ピースプレナーフォーラムでは、「平和」という言葉をより多角的に捉える視点を得ることができました。特に、DEI（多様性・公平性・包摂性）という概念が、平和と深く結びついているという指摘が印象に残っています。社会の中で声を上げにくい人や、排除されがちな存在に目を向けることが、対立や分断を生まない社会につながるのだと理解しました。

これまで私は、平和を戦争の有無という観点でのみ考えていましたが、日常の中にある不平等や無意識の偏見こそが、将来的な対立の芽になる可能性があることに気づかされました。自分自身の考えや行動にも、知らず知らずのうちに偏りが含まれていないかを問い直す必要があると感じました。

今回の学びを通して、平和とは完成された状態ではなく、問い続け、修正し続けるプロセスであるという認識を持つようになりました。

③学びの成果

本校では、Nagasaki Peace-preneur Forum への参加を通して、生徒が平和を「知識として理解する段階」から「自らの価値観や将来と結びつけて再構築する段階」へ進むことを目指した。生徒たちは、対話、多様性、行動といった異なる切り口から平和を捉え直し、それぞれ固有の問いを形成している。本取組は、被爆地・長崎に学ぶ高校生が、平和を静的な概念ではなく、社会の中で実践され続けるものとして捉える力を育む機会となった。

2 探究全国大会への参加による成果の発表と全国水準での相互評価

(1) 三菱みらい育成財団主催「高校生 MIRAI 万博」

①本事業の概要

三菱みらい育成財団が主催する「高校生 MIRAI 万博」は、同財団より指定を受けた、全国約 250 校の探究推進校のみが参加できる探究発表の全国大会である。高校生が探究活動の成果を世界に向けて発信することを目的としている。

全国から 364 チームが一次審査に応募し、100 チームが二次審査へ進出した。その中から、最優秀賞 6 チーム、優秀賞 14 チームの計 20 チームが選出され、令和 7 年 7 月 31 日（木）、大阪・関西万博会場において開催された「高校生 MIRAI 万博 第 1 部 高校生の成果発表」にて代表発表を行った。

本校からは 2 チームが出場し、最優秀賞（全国 1 位相当）1 チーム、優秀賞（全国 2 位相当）1 チームを受賞するという、全国で唯一のダブル受賞を達成した。最優秀賞チームは EXPO ホール「シャインハット」、優秀賞チームはウーマンズパビリオン「WA」スペースにて発表を行い、いずれも高い評価を受けた。

最優秀賞 Peace Creators from Nagasaki

(高3 鴨川 恵子、植坂 日和、橋口 由望、小山 翠、藤原 美結)

探究テーマは「Critical Thinking for Peace (平和のための批判的思考)」である。被爆 80 年を迎える現在、平和を「一方向から教え込むもの」としてではなく、相手の立場や視点を理解し、多面的に考える力を育成する重要性に着目した。

生徒たちは、表と裏の両方が表紙となる「平和の絵本」を制作し、同一の出来事を異なる立場から読み進める構成を考案した。物語は、表側では「かいじゅう」、裏側では「にんげん」を主体として展開され、最終的に争いへと至る結末を迎える。読者は「なぜ争いが起きたのか」「どうすれば防げたのか」を両者の視点から考えることを求められる。

探究の過程では、国連大学、東京大学、長崎大学、ハワイ大学などの研究者・実務家と連携し、専門的な助言やフィードバックを受けながら内容を深化させた。完成した絵本はクラウドファンディングにより製本され、県内の図書館や学童施設、海外の大学・国際機関へ寄贈されるなど、実社会への還元も行っている。

当日の発表では、探究内容と表現力の両面において高い完成度を示し、多くの参観者の共感を呼んだ。質疑応答では、探究を後輩へとつないでいく意志も語られ、平和探究の継承という点でも高く評価された。

優秀賞 ヒロシマ・ナガサキ平和プロジェクトチーム (広島市立舟入高校との合同探究)

(高3 山口 とわ暉、堤 ももか、高山 咲輝、北島 未颯、李 崎睿、安田 優花)

本チームは、広島市立舟入高校との合同チームとして、「新時代における平和の伝承法」をテーマに探究を行った。被爆体験の風化が進む中、デジタル技術を活用した新たな平和の伝承の可能性に着目した。

東京大学大学院 渡邊英徳研究室と協働し、AR 技術やデジタル地図プラットフォーム「Re:Earth」を活用し、オリジナルの平和学習用デジタルマップを制作した。また、外国人を対象としたツアーを実施し、実践を通じた有用性の検証を行った。

本探究は一過性の成果にとどまらず、今年度以降も後輩へと引き継がれ、引き続き舟入高校との協働探究として発展を続けている。



シャインハットでの探究発表



長崎東と舟入の合同チーム

②生徒の省察

・探究とは、考え続ける営み、そして「対話」を生み出すもの Peace Creators from Nagasaki 高3 鴨川 恵子

本探究では、平和を一つの正解として示すのではなく、なぜ争いが生まれるのかを、異なる立場の双方から考えることの重要性に着目しました。そのため、表と裏の両方から読み進めることができる絵本という形を採用しました。制作の過程では、物語の展開や表現について何度も議論を重ね、「本当に相手の立場に立っているのか」「自分たちの価値観を一方的に押しつけていないか」を繰り返し問い直しました。この過程は容易ではありませんでしたが、探究を深めるうえで欠かせない時間であったと感じています。

また、国連大学や東京大学、長崎大学、ハワイ大学などの研究機関、児童ボランティアのNPO、絵本の出版社等と連携し、多くの専門家の方から助言をいただきました。指摘を受けるたびに、自分たちの考えの甘さや視野の狭さに気づかれ、探究内容を修正し、再構築する必要がありました。こうしたやり取りを通して、探究とは仮説を立てて終わるものではなく、批判を受け入れながら考え続ける営みであると学びました。

当日の発表では、多くの来場者が真剣に話を聞いてくださいました。発表後には直接感想を伝えていただく機会もあり、自分たちの探究が他者の心に届いたことを実感しました。特に、平和について改めて考えさせられたという声を聞いたとき、嬉しさと同時に、探究の意義を強く感じました。

高校生 MIRAI 万博への参加を通して、私たちは、探究とは成果物を完成させることが目的ではなく、社会に問いを投げかけ、対話を生み出すものであると学びました。この経験は、今後の探究活動や進路を考えるうえでの大きな指針となるものであり、後輩たちにもぜひつないでいきたい学びです。

・平和は「自分たちの世代が考え、更新し続けるもの」 ヒロシマ・ナガサキ平和プロジェクトチーム 高3 北島 未颯

私たちは、戦争の記憶を知識として残すだけでなく、「次世代にどう伝わり続けるか」という問いを出発点に探究を行いました。被爆体験者の高齢化が進む中で、従来の語り継ぎの方法だけでは限界があると感じ、デジタル技術を活用した新しい平和の伝承の形を模索しました。

探究の過程では、技術を使えば伝わるわけではなく、「何を、誰に、どのように伝えるのか」という目的設定が最も重要であることを学びました。広島を生徒と協働する中で、同じ平和というテーマでも、地域や経験の違いによって視点が異なることを実感し、議論を重ねることで考えが深まっていきました。

万博という大きな舞台で発表できたことは、自分たちの探究が社会とつながっていると実感できる貴重な経験でした。今回の学びを通して、平和は受け取るものではなく、「自分たちの世代が考え、更新し続けるもの」だと強く感じています。

③学びの成果

令和7年度「高校生 MIRAI 万博」への本校生徒の参加は、単なる発表経験にとどまらず、自ら問いを立て、多様な視点から課題を深く考察し、それを世界に向けて発信する力を育んだ意義ある挑戦であった。発表に至る過程では、大学・NPO・企業等の多様な機関との連携、舟入高校との共同探究、クラウドファンディングによる資金調達、寄贈・普及活動など、通常の探究の枠を超えた実践的な学びを積み重ねた。

万博本番での発表では、プレゼンや質疑応答を通じて、情報伝達力と対話力が求められる場面に直面した。発表後に多くの参観者から声をかけていただいた経験は、生徒にとって自信となり、探究の意義を再確認する貴重な機会となった。

今回の参加を通して、生徒たちは「探究を社会につなげる力」「多様な価値観を理解し伝える姿勢」、そして「探究成果を行動につなげる責任感」を体得した。これらは今後の学びや進路選択においても、大きな財産になると考える。

なお、本大会に出場した生徒は、全員が三菱みらい育成財団および同窓会奨学会の支援を受けて実施した「探究スタディツアー（広島、沖縄、東京大学、国連大学、ハワイ等）」に参加した。これらの現地研修や専門家との対話が、探究の深化および全国大会での成果につながっており、学内外の支援が有機的に結びついた教育実践となった。

(2) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 全国高校生フォーラム

①本事業の概要

文部科学省が推進する「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業」は、高校生が国際的な視点で社会課題に取り組むための探究的学習機会を提供する国家的事業である。本事業は、全国の高校生が日頃の探究成果を発信し合い、英語を用いたプレゼンテーションやディスカッションを通して相互理解・国際的視野を高めることを目的としている。WWL 事業は、従来の SGH ネットワーク (スーパーグローバルハイスクール) を引き継ぎ、より高度で多様な学びのネットワークを全国に構築する取り組みである。本校は文部科学省より、平成 27 年度より SGH、令和 2 年度より WWL の指定を受け、拠点校として高度で深い探究的な学びを推進してきた。

「全国高校生フォーラム」は、文部科学省および WWL コンソーシアム事務局の主催で、令和 7 年 12 月 21 日 (日) に東京都・国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催された。全国の WWL 事業参加校・SGH ネットワーク校の高校生が一堂に会し、日頃の探究活動に基づくポスター発表 (英語ポスターセッション) や英語による生徒交流会 (ディスカッション) を通して、グローバルな社会課題の提案と解決策を共有・議論した。原則としてフォーラムのすべてのプログラムは英語で実施された。

本校チームは、戦後 80 年を迎える今日、「戦争記憶の継承と平和の推進」というテーマを設定し、戦争記憶の風化が進む現代において、戦前の長崎のモノクロ写真を、AI 技術を活用してカラー化するという独自の探究活動に取り組んだ。被爆体験者と対話を重ねる中で、「歴史の真実の色とは何か」という問いを立て、AI による写真カラー化の技術と歴史的背景の関係を深く考察した。

探究の深化にあたり、東京大学大学院・渡邊英徳研究室を訪問して助言を受けるとともに、技術的・歴史的検証を重ねた。生徒たちは自らクラウドファンディングを立ち上げて資金を調達し、修正したカラー化写真をまとめた「写真集」を製本した。完成した写真集は、国連をはじめ国内外の平和関連機関への寄贈を計画し、社会実装を視野に入れた普及活動を進めている。本校チームの研究発表は、WWL フォーラムにおける長崎の抱える課題とグローバルな文脈を結びつける探究として高く評価された。

②生徒の省察

・英語での発表を通して 高2 本田 稀乃

今回の WWL フォーラムに参加し、これまでの学びをさらに広げる貴重な経験をすることができました。フォーラムに参加する前は、班の中であまりまとまりがなく、写真集が完成するか不安でした。

しかし、メンバーと協力しながら少しずつ意見を出し合い、工夫しながら作業を進めた結果、無事に完成させることができ、達成感を感じました。

特に印象に残ったのは、英語での発表と質疑応答です。正直に言うと、英語で発表すること自体はとても難しく、準備段階では不安や緊張が大きくありました。しかし、その分、原稿の内容や表現を何度も見直し、発音や話すスピードにも気を配りながら練習を重ねました。その結果、本番では緊張しつつも落ち着いて発表することができ、今までで一番良い発表ができたと感じています。自分の考えを英語で相手に伝えられたことは、大きな自信につながりました。

また、発表後の質疑応答では、英語で質問を聞き取り、その場で考えて答える必要があり、高い対応力が求められました。とっさに言葉が出てこない場面もありましたが、相手の意図をくみ取り、自分なりの言葉で答えようと努力した経験は非常に貴重でした。この経験を通して、英語は文法の正確さだけでなく、相手に伝えようとする姿勢が大切であることを実感しました。練習を支えてくださった先生方に感謝を忘れず、次の目標に向かって進んでいきたいです。



英語によるポスターセッション

・高め合えたフォーラム 高2 相川 乃々

今回のWWLフォーラムでは、「AIを活用した戦争記憶の継承と平和の推進」というテーマで探究発表を行い、多くの学びを得ました。練習段階では、先生方から発表の添削をたくさんしていただき、とてもありがたかったです。特に「感情を込めて話すこと」を意識するよう指導され、最初は少し恥ずかしさもありましたが、他の発表者の話を聞くうちに、感情を込めて話すことで内容がより伝わりやすくなることを実感しました。発表では、内容だけでなく伝え方も大切であることを学び、今後のプレゼンテーションに活かしていきたいです。

本番では練習の成果もあり、自信を持って自分たちの探究を発表できました。審査員から「写真集をどのように普及させていくか」という質問をいただき、制作だけでなく社会への発信も重要であると改めて感じました。また、他校の生徒とのディスカッションでは、英語力や意見の深さ、リーダーシップの力に触れ、自分も将来そういう存在になりたいと強く思いました。今回のフォーラムを通して、自分の成長や今後の目標が明確になり、支えてくださった皆様への感謝の気持ちも深まりました。

・伝える力の大切さ 2年7組 三浦 心和

WWLフォーラムに参加して、自分が成長できた点と今後の課題を認識できました。特に成長したと感じたのは、伝える力です。多くの方の協力を得て時間をかけて取り組んできた探究を、限られた時間で相手に分かりやすく伝える難しさや大切さを強く実感しました。今回は英語での発表であったため、思うように言葉が出てこず、もどかしい場面もありましたが、相手の目を見て話すことや、ポスターの該当部分を指すなど視覚的に工夫することで、少しでも伝わるように努めました。

発表後の審査員からの質問や他校の発表を聞く中で、自分たちの課題がより明確になりました。特に、専門的な内容を知識のない人にも分かりやすく伝え、多くの人に発信していくことが今後の大きな課題であると感じました。完成した写真集を国連や全国の平和関連機関に送付し、講評を集めることで、さらに良いものへと発展させていきたいです。支えてくださった先生方や支援者の皆様への感謝を忘れず、探究活動をよりよいものにしていきたいと思えます。

③学びの成果

WWL全国高校生フォーラムへの参加は、生徒が自らの探究成果を英語で発信し、多様な価値観と相互理解を深める貴重な機会であった。本校生徒の取り組みは、戦争記憶の継承という社会的意義の高いテーマを、AIという最新のデジタル技術を用いるとともに、被爆者とのリアルな対話を重ね歴史の真実に迫り、その成果を高度な表現力と探究力で示した。また、写真集の社会的普及を視野に入れた探究は、学びを社会に還元する実践的学びとなった。

この経験を通じて、生徒は問いに向き合い、国際的な文脈での表現・共有・対話の能力を高めた。フォーラムでの質疑応答や他校との交流は、自身の課題を客観的に把握し、今後の探究活動に必要な改善点を明確にする契機となった。

3 国内外の探究スタディツアーを通じた現場体験による問いの深化

本校の探究スタディツアーは、三菱みらい育成財団および公益財団法人長崎東同窓会奨学会の助成を受け、「グローバルかつアカデミックな探究」を軸として設計されている。

代表生徒は、国際機関、大学、研究機関などの現場に直接接することで、日頃の探究テーマに沿った「問い」を深化させる学習機会を得ることを目的としている。現場体験を通じた学びを自らの探究活動に還元し、学術的な理解と社会実装の視点を統合することを意図している。

令和7年度実施分の探究スタディツアーは、次の一覧のとおりである。

【令和7年度 探究スタディツアー】

No.	研修地	主な研修先・テーマ 等	補足事項
1	ベトナム	長大熱帯医学研究所ベトナム拠点、ハロン湾水質調査	R7.11/4～11/8 (5日) 生徒4名
2	ニューヨーク	国連本部研修、グラウンド・ゼロ、移民博物館 等	R8.3/4～3/9 (6日) 生徒2名
3	ハワイ	真珠湾研修、ハワイ大学、プランテーションビレッジ等	R8.3/25～3/31 (7日) 生徒2名
4	カリフォルニア州 モントレー	ミドルベリー国際大学院主催の国際会議に招聘	R8.3/25～3/31 (7日) 生徒1名
5	沖縄	連携校交流、学徒隊研修、遺骨収集ボランティア講話等	R7.10/17～10/19 (3日) 生徒4名
6	広島①	国連訓練調査研究所 (UNITAR) での探究発表、 舟入高との高校生平和共同宣言発表	R7.8/5～8/6 (2日) 生徒2名
7	広島②	舟入高主催の模擬国連に参加、 広島市内平和フィールドワーク	R7.11/1～11/2 (2日) 生徒5名
8	東京①	東京大学大学院情報学環 渡邊英徳 教授 研究室訪問、 デジタルを活用した平和探究研修	R7.10/9～10/10 (2日) 生徒4名
9	東京②	国連大学での探究発表、世界銀行研修	R8.1/20～1/21 (2日) 生徒4名
10	三菱重工	特別講演、総合研究所見学、研究所員ワークショップ	R7.11/1(1日) 生徒40名

上記一覧より、令和8年2月4日現在の実施分 (No.2 ニューヨーク、No.3 ハワイ、No.4 カリフォルニア州モントレー 除く) を、生徒の省察を含めて報告する。

(1)ベトナム探究スタディツアー

①本事業の概要

ベトナム探究スタディツアーは、「感染症」と「水質汚染」という地球規模の課題をベトナムという現場を通じて多角的に探究することを主たる目的として実施した。長崎大学熱帯医学研究所 (熱研) ベトナム拠点という世界トップレベルの研究環境を活用し、専門家による講義、水質調査実習、国際協力の最前線で活動する実務家との対話を通じ、高度な科学的リテラシーとグローバルな視座を持つ人材の育成を目指したものである。

【期日】 令和7年11月4日 (火) ～11月8日 (土)

【研修内容】

- ・熱帯医学研究所の専門家による感染症 (バイオセーフティー、新興感染症、人獣共通感染症など) の講義
- ・ハロン湾および現地河川の採水、および大腸菌コロニー数比較による水質調査実習
- ・JICA 海外協力隊 (理学療法士) としての活動経験談や、国際協力の現状に関する研修

②生徒の省察

・知らないことを知ることの大切さ 高2 長谷川 明鐘

私は今回のフィールドワークを通じて、感染症の具体的な実態、社会的な課題、そして海外を視野に入れることの意義という三つの大きな学びを得ました。

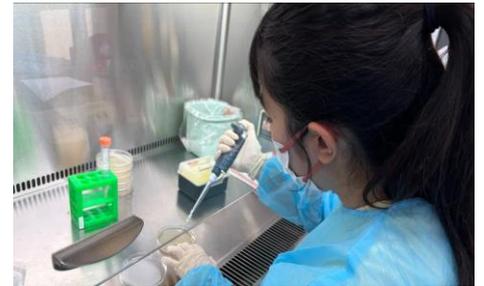
特に印象に残っているのは、今回の研修でご指導いただいた、長崎大学准教授 阿部遥先生の「新興感染症が発生した際、最も怖いのはその病気のことを何も知らないことだ」という言葉です。これまで私は、医療設備の整った日本で研究する方が効率的なのではないかと考えていました。しかし、現地で実際に何が起きているのかを直接知らなければ、自国の人々を守ることもできないのだと痛感しました。

また、狂犬病の事例では、致死率が高い病気であるにもかかわらず、正しい知識がないために病院へ行かず、伝統医療に頼って命を落とす子供がいるという現実には衝撃を受けました。経済格差や教育の普及といった社会構造そのものが、感染症のリスクを左右しているのだと気づきました。今回の経験は、医療と社会をより広い視点で見つめ、将来どのように行動していくべきかを考える大きなきっかけとなりました。

・使命感 高2 坂田 美羽

ハノイの街並みから熱帯医学研究所での実習まで、濃密な5日間でした。タンロン遺跡の地下壕で見た光景が、今ニュースで見るウクライナの状況と重なり、平和の尊さを改めて考えさせられるところから私の旅は始まりました。

実習では、ハロン湾と現地の川の水質を比較しました。見た目は海の方が汚れているように見えたが、実際に培養してみると川の水から大量の大腸菌が検出され、視覚的な情報だけで判断する怖さを知りました。



ハロン湾で回収した汚水の水質調査

生活排水がそのまま流れるインフラの現状を知り、科学的なデータが社会の課題を浮き彫りにすることを実感しました。

また、講師の先生方の「大変だけれど誰かがやらなければならない」というフィールド研究者としての使命感に心を打たれました。私はこれまで、正解のない物事を考えるのが苦手な研究職は向いていないと諦めていましたが、先生方の熱意に触れ、看護の道を目指しながらも、将来的にもう一度研究の道に挑戦してみたいという新しい目標が芽生えました。

・異文化を尊重し、持続可能な未来を創る姿勢 高2 下釜 彩智

今回のベトナム訪問で最も心に残ったのは、現地の人々の生き方と、国際協力のあり方についてです。

ベトナムの医療事情を伺う中で、公立病院と私立病院の極端な格差や、家族が身の回りの世話を全て行う入院形態など、日本との違いに驚きの連続でした。しかし、伝統医療を単に「古いもの」として否定するのではなく、精神的なカウンセリングとしての価値を認めつつ、いかに正しい知識を普及させていくかという長崎大学特任研究員 天野むらさき先生のアプローチに感銘を受けました。相手の文化を尊重し、受け入れた上で専門家として何ができるかを考える姿勢は、世界で活躍するために不可欠な資質だと学びました。

また、阿部先生が話されていた「現地の研究者を育成する」という仕組みは、一過性の支援ではなく、知識がその地で伝承されていく持続可能な国際協力の形であり、強く心に響きました。このフィールドワークで得た多角的な視点を忘れず、必要な場所に医療が届く社会を目指して努力していきたいです。

・好奇心の連鎖が、人生の視界を広げる 高2 北村 はなこ

「たった5分が人生を変える」——長崎大学教授 長谷部太先生のこの言葉が、今の私に深く刺さっています。ベトナムの街に出て驚いたのは、バイクの洪水のような交通状況です。一見混沌としています。実は人々が互いに譲り合い、驚くべき適応力で調和を保っていました。ハロン湾の鍾乳洞で石の形を動物に見立てる感性からも、自然と共生するベトナム独自の精神性を感じ、一つの事象から背景にある文化を紐解く面白さを知りました。

研究実習では、長崎大学のNga先生に質問を重ねる中で、自分の手でデータを明らかにする研究職への憧れが強くなりました。「研究者は未来の患者を治すヒーローである」という阿部先生の言葉や、JICAで「giveよりtakeの方が大きい」と語る長崎大学の瓜田むらさき先生の姿勢を見て、働くことの本質を学んだ気がします。

大学受験をゴールにするのではなく、その先もずっと学び続け、若いうちに何でも挑戦してみたい。このツアーを通じて、希望に満ちた笑顔で自分の道を切り拓いていく大人たちの姿に、自分の将来を重ね合わせることができました。

③学びの成果

本研修を通して、生徒たちは座学では得られない「生きた知」に触れ、以下の3点において顕著な成果を収めた。

i) 科学的根拠に基づく考察力の向上

ハロン湾を対象とした水質調査実習では、「見た目の濁り」という主観に依存せず、大腸菌コロニーの数という「定量的なデータ」に基づき、現地のインフラ課題（下水道整備の遅れ等）を論理的に考察する姿勢が見られた。

ii) 多角的な課題分析視点の獲得

感染症の蔓延を単なる医学的現象として捉えるのではなく、経済格差、伝統的慣習、教育環境、さらには野生動物との距離といった「社会構造」の多層的な問題として分析する視点を得たことは大きな収穫である。

iii) 国際協力の本質の理解

「現地の文化や伝統医療を尊重しつつ、いかに正しい知識を普及させるか」という専門家のアプローチに触れ、独りよがりな支援ではない、相手に寄り添った持続可能な国際貢献のあり方を深く洞察した。

また、本研修を通して、生徒一人ひとりが自らの進路や生き方を「世界」という文脈で再定義し始めたことは大きい。「研究者は未来の患者を治す仕事である」という定義や、「誰かがやらなければならないことを引き受ける」という使命感に触れたことで、生徒たちは自らの学習が社会の課題解決に直結していることを再認識した。一度は諦めかけた研究職への再挑戦を決意する者や、自身の適性を冷静に見つめ直す者など、その内省は極めて深いものであった。

長谷部先生の「たった5分が人生を変える」という言葉の通り、ベトナムの風土、熱意ある専門家との出会いは、生徒たちの価値観に不可欠な変容をもたらした。現地で感じた「違和感」を放置せず、その背景を問い続ける姿勢こそが、今後の探究活動、ひいては予測困難な未来を切り拓く原動力になると確信する。

(2) 沖縄探究スタディツアー

①本事業の概要

沖縄の平和遺構を巡るフィールドワークや、長崎と沖縄の高校生による平和交流を通し、平和探究を深化させることを目的として実施した。研修は沖縄尚学高等学校、沖縄県立那覇国際高等学校と共同で実施し、沖縄と長崎の高校生がともに学び合い、高め合う貴重な機械となった。

【期日】令和7年10月17日（金）～10月19日（日）

【研修内容】

- ・学徒隊研修：ひめゆり学徒隊ゆかりの地（南風原20壕、アブチラガマ、ひめゆり記念館）、
白梅学徒隊ゆかりの地（ヌヌマチガマ、第24師団山第一野戦病院跡、白梅の塔）
- ・対馬丸研修：対馬丸記念館における講話および施設見学
- ・専門家講話：NPO法人ガマフヤー代表・具志堅隆松氏による遺骨収集ボランティア講話
- ・高校生交流：3校合同での平和探究発表および「平和を阻むもの」をテーマとしたディスカッション

②生徒の省察 高2 布江 良成、山崎 杏樹、平 陽菜子、三浦 心和

・対馬丸記念館

対馬丸記念館にて生存者の方の講話を聞き、施設を見学しました。太平洋戦争中、疎開する子どもたちを乗せた対馬丸が米潜水艦に撃沈されたこの事件は、数字以上の重みを持って迫ってきました。「生き残った自分が語らなければ、あの子どもたちは本当に死んでしまう」という生存者の言葉に、語り継ぐ覚悟と使命感の深さを感じ、胸を突かれました。展示された遺品や写真の一枚一枚に、奪われたはずの笑顔や未来があったことを痛感し、戦争が奪うものの大きさを改めて胸に刻みました。

・学徒隊研修

南風原 20 壕では、再現された当時の「匂い」を嗅ぐ体験をしました。汗や血、排せ物が混ざった強烈な臭気は、数分耐えるのも困難なほどでした。看護や飯上げに従事したひめゆり学徒隊の過酷な環境を、五感を通して突きつけられました。

アブチラガマでは、懐中電灯を消す暗闇体験を行いました。数分間の暗闇でしたが、そのなかでも、負傷兵の苦しみや当時の人々の不安が伝播してくるような感覚になりました。何ヶ月もこの暗闇に閉ざされていた人々の心境は想像を絶するものであり、平和の尊さを、身をもって学ぶ時間になりました。



沖縄の高校生とヌヌマチガマを巡検

ひめゆり記念館では、展示物、写真、手紙、映像から、学徒たちの足跡を辿りました。特に印象的だったのは、戦前の楽しそうな学校生活の写真です。今を生きる私たちと変わらない夢や希望を持っていた少女たちが、戦争によって家族も友人も、そして一生消えないトラウマを背負わされた事実言葉に言葉を失いました。戦争はすべてを奪う。この研修で得た「日常の幸せ」への視点を、自身の探究活動に繋げていきたいと思いました。

また、沖縄尚学高校のガイドにより、ヌヌマチガマや白梅の塔を巡りました。白梅学徒が砲弾の中を走った坂を実際に走り、水没するガマの中での苦しみに思いを馳せました。同年代の少女たちの無念さを想い、胸が締め付けられました。また、沖縄尚学の生徒がメモも見ずに自らの言葉で歴史を語る姿に、感銘を受けました。長崎の原爆についても、自分たちの言葉で語り継ぐ必要があると、改めて思いました。

・具志堅 隆松氏 講話

NPO 法人ガマフヤー代表の具志堅隆松さんより、遺骨収集の取組についてご講演いただきました。遺骨収集の実際について学ぶことができました。また、当時の自決ではなく「自決させられた」という軍国主義の異常さや、現代社会が再び戦場になる危うさについて話され、厳しい国際情勢について考えさせられました。

・高校生交流研修

長崎東・沖縄尚学・那覇国際 3 校合同のディスカッションを行いました。そのなかで、「平和を阻んでいるもの」をテーマに議論しました。長崎の生徒として原爆の悲惨さを伝えるとともに、沖縄の生徒が語る「日常の中にある平和への問い（基地問題やガマ）」に触れ、地域による平和の捉え方の違いを学びました。平和とは単に戦争がない状態ではなく、互いを理解しようとする対話そのものであるという結論に、全員で達しました。

③学びの成果

本研修は、被爆地・長崎の生徒が「戦場となった沖縄」の歴史的真相に直接触れることで、平和探究の次元を高める貴重な機会となった。

特筆すべき成果は、生徒たちが戦跡の現状や遺骨収集の現場を視覚・嗅覚を含む五感で体験したことにより、抽象的な「平和」の概念を、具体的かつ切実な「他者への共感」へと昇華させた点である。特に、沖縄尚学高校や那覇国際高校の生徒との合同フィールドワークおよびディスカッションにおいては、米軍基地問題という「現在進行形の課題」に触れることで、歴史の継承が単なる回顧ではなく、現代社会の構造的問題を直視することに繋がっていると確認できた。

本事業を通じて得られた沖縄の高校生とのネットワークは、今後の本校における平和探究学習の継続的なプラットフォームとなる。生徒たちが自らの言葉で「戦争の非道さ」と「平和の構築」を語り始めた姿は、次世代のリーダー育成という本事業の目的を達成した証左であり、本校の他の生徒にも強い波及効果をもたらすものである。

(3) 広島探究スタディツアー（国連訓練調査研究所：UNITAR）

①本事業の概要

国連訓練調査研究所（UNITAR：United Nations Institute for Training and Research）は、スイスのジュネーブに本部を置く国連機関である。発展途上国や紛争後地域のリーダー育成、平和構築、環境保護など、多岐にわたる分野で専門的なトレーニングを提供しており、広島に支部事務所があり、世界で唯一「被爆地」に拠点を置く国連機関として、核軍縮や平和構築の研修に注力している。

本研修は、UNITAR 主催の国際ワークショップへの参加をメインとしている。被爆 80 年を迎え、令和 7 年 8 月 6 日に、広島・長崎の若者が世界をリードする専門家と対話し、具体的な「平和へのロードマップ」を提示する、というものである。生徒は UNITAR 職員の指導のもと、事前にオンラインで舟入高校をはじめ、広島市内の高校生と協議しロードマップを作成した。6 日当日は中満泉国連事務次長や岸田文雄元総理をはじめ各界識者の前で、英語で成果を発表した。

さらに本研修では、広島女学院高校主催の国際会議「広島ピースフォーラム」にも参加し、協働の輪を広げている。

【期日】令和 7 年 8 月 5 日（火）～8 月 6 日（水）

【研修内容】

- ・広島女学院高校主催「広島ピースフォーラム」参加：国内外の高校生による国際会議およびディスカッション
- ・平和遺構・施設見学：広島平和記念資料館、原爆ドーム、爆心地
- ・平和記念式典・慰霊式：広島市平和記念式典、広島市高等女学校原爆慰霊式典への参列
- ・ユニタール（UNITAR）研修：国際ワークショップ「被爆 80 年・若者が提案する平和へのロードマップ」参加

②生徒の省察 高2 大坪 碧衣、横峯 葉子

・広島ピースフォーラム

研修初日は広島女学院高校で開催された「PEACE FORUM」に参加しました。アメリカ、韓国、日本各地から集まった高校生と共に、核を巡る最先端の講義を受けた後、小グループで社会問題の解決策を議論しました。私たちのチームは「戦争孤児」をテーマに、キリスト教的視点を用いた心のケアや里親募集の具体案について意見を交わしました。自分にはない宗教的・多角的な視点に触れ、思考の幅が広がる貴重な経験となりました。

・平和祈念資料館・爆心地

初日の午後は舟入高校の生徒と合流し、広島平和記念資料館を見学しました。長崎の展示と比較して、広島は手紙や絵、個人の手記など「個人個人の人生」にフォーカスした展示が非常に多いように感じました。核の脅威を自分事として捉えさせる構成に強く心を打たれました。また、原爆ドームや爆心地も訪問しました。長崎には現存する被爆遺構が少ないため、街の中に立ち続ける原爆ドームの姿は新鮮であり、爆心地が公園ではなく石碑のみで記されている点にも両市の文化や復興の過程の違いを感じました。

・平和記念式典

研修 2 日目の朝、平和記念式典に参列しました。知事の「核戦争になれば人類も地球も再生不能になる」という言葉や、小学生による「私たちが語り継ぐ」という誓いを聞き、終戦 80 年という節目の重みを再認識しました。世界中で紛争が絶えない今、唯一の被爆国である私たちがより一層強く世界へ訴えかけていかなければならないと決意を新たにしました。また、協働校である舟入高校の平和式典参列は、共に平和への想いを強くする貴重な時間となりました。

・UNITAR でのロードマップ発表

2 日目の午後は、ANA クラウンプラザホテル広島で行われた、ユニタール主催の国際イベントに参加しました。このイベントでは、長崎・広島の高校生が平和へのメッセージを英語で発信しました。事前準備として、広島の高校生とオンラインで準備を進めてきました。そのメンバーと初めて対面し、ネイティブの方の助言を仰ぎながら、自分たちのメッセージが薄まらないよう英語表現をぎりぎりまで追求しました。

本番では「被爆体験継承」をテーマに、多様な媒体を用いた継承の重要性を発表しました。ディスカッションでは、被爆者の後東利治さんから「じっくりと考えて書き残す大切さ」を、広島大学平和センター長・ファンデルドゥース瑠璃先

生からは、「命が一番大切という根本」を学びました。自分の意見を積極的に発信することへの苦手意識を克服し、自らの成長を実感できる場となりました。

③学びの成果

本研修は、被爆80年という歴史的な節目に向け、国連機関（UNITAR）という国際的な舞台を活用したハイレベルな学びの場となった。生徒たちが地理的・経済的制約を超え、国際社会が求める「平和構築の作法」を習得するための決定的な原動力となった。

成果の核心は、事前学習から本番に至る数ヶ月間のプロセスにある。協働校である舟入高校をはじめとした広島市内の複数の高校生とのオンライン協働を経て、英語による「平和へのロードマップ」を策定・発表したことは、生徒たちの自己効力感を飛躍的に高めた。単なる参観型の研修に留まらず、専門家や被爆者との対等な対話を通じて提言を行う「参画型」の学びを実現できたことは、高い教育効果につながっている。

長崎と広島、それぞれの被爆の実相を比較検討し、国際的な視座から「核兵器廃絶」の具体策を論理的に構築した経験は、生徒個人の資質向上のみならず、本校が目指すグローバル・リーダー育成の象徴的事例となった。本事業で得られた知見と国際的な繋がりを次年度以降の活動に還元し、持続可能な平和探究教育のモデルを確立していく所存である。



「平和のロードマップ」を英語発表

(4) 広島探究スタディツアー（ヒロシマ・ナガサキ模擬国連）

①本事業の概要

模擬国連（Model United Nations）は、生徒一人ひとりが一国の外交官（大使）になりきり、国際会議のシミュレーションを行う教育活動である。自国の国益を守りつつ、国際社会全体の利益となる解決策を「交渉」と「合意形成」を通じて模索する。本研修では、事前の膨大なリサーチに基づく「ポジションペーパー（政策立案書）」の作成、他国とのロビー活動（非公式協議）、決議案の起草、そして英語による演説といった高度なプロセスを経験した。

今回の模擬国連で扱うテーマは、「難民問題（Refugees）」と「エネルギー問題（Energy）」である。難民問題については、本事業の主催校である立舟入高校を会場として、対面で英語により実施され、エネルギー問題については、オンラインで本校と舟入高校をつなぎ、日本語で実施された。当日に向け、生徒たちは半年間、国際教養の勉強を重ねてきた。結果、本大会において、グランプリ（最優秀賞）、グッドスピーチ賞、グッドパフォーマンス賞を受賞した。

【期日】令和7年11月1日（土）～11月2日（日） ※令和8年1月23日（月）に本校で自校生徒のみで実施

【研修内容】

- ・模擬国連…「難民問題（Refugees）」（対面・All English）、「エネルギー問題（Energy）」（オンライン・日本語）
- ・広島平和フィールドワーク（広島平和祈念資料館、原爆ドーム、爆心地、レストハウス）

【主催・協力校】広島市立舟入高等学校（主催）、広島中等教育学校、広島県立基町高等学校、長崎東高等学校

②生徒の省察

・生きることの残酷さと尊さの継承 高2 山田 果穂

広島平和記念資料館の展示室で、私は「生きたい」と「死にたい」という、正反対でありながら地続きにある二つの切実な声に直面しました。皮膚がめくれ、水を求めて必死に生き延びようとする人々の描写がある一方で、ケロイドや放射線障害に心を折られ、もう苦しみたくないと思う人々の手記。どちらも命の重さを訴える真実であり、生きることがいかに残酷で、かつ尊いものであるかを私に突きつけました。あの日、広島と長崎で起きた事実を「知識」として知るだけでなく、この相反する感情のうねりさえも忘れずに繋いでいくことが、唯一の被爆地から来た私たちの使命であると痛感しました。

模擬国連においては、南アフリカ大使として初めての英語交渉に挑みました。準備段階では、単なるデータの羅列では

なく「南アフリカとして今後どうしていきたいか」という国家の意思を形にすることに苦心しました。他国の政策を理解するため、翻訳機に頼らず電子辞書を駆使して53ページに及ぶ資料を読み込み、一カ国ずつその意図を確認したプロセスは、国際社会の複雑さを理解する土台となりました。直前の講義を受け、新幹線の中でスピーチを削り、戦略を練り直した時間は、知的な持久力を試される経験でした。結果として、目標とした30億ドルの資金と62人の人員支援をすべて獲得できたことは、論理的な準備がいかに大きな成果を生むかという実感を伴う成功体験となりました。

・戦略と調和の模索 高2 下釜 彩智

広島平和祈念資料館で見た、血の付いた服や黒焦げの弁当箱といった「個人の人生」を物語る展示は、私に「遺骨すら戻らなかった人々の無念」を強く印象づけました。生き残ること、遺骨が戻ることさえ奇跡であったという視点は、平和を「生存」という最も根源的なレベルから考えるきっかけとなりました。

模擬国連では、すべて英語という環境に当初は恐れを抱いていましたが、交渉を通じて「お互いの折衷案を見出す」というプロセスの面白さに引き込まれました。南アフリカ代表として、アフリカ大陸のリーダーという立場から、大国に対して資源を交渉材料に資金援助を働きかける戦略を練りました。1日目はただ主張を述べるだけでしたが、2日目は想定外の要求に対しても、その場で共通項を見出し、解決策を提示する柔軟な対応ができました。

また、他校の優秀な生徒たちが論理を組み立てる姿に強い刺激を受け、英語を「話す」ことだけでなく、その背景にある「思考の深度」の重要性を学びました。研修でご指導をいただいた舟入高校の柏原奨平先生から学んだ「Personalization（自分ごと化）」という言葉が胸に、難民問題や核の問題を遠い国の出来事ではなく、自分たちの未来に直結する課題として捉え、具体的な行動へと繋げていきたいと決意しています。

・当たり前の大切さ 高2 古井 穂花

今回の研修は、自身の平和に対する姿勢を根本から見直す転換点となりました。幼少期に長崎で見た原爆写真への恐怖から、これまで自発的に戦争を学ぶことを避けてきましたが、広島で家族を想う被爆者の手記に触れ、当たり前には家族がいることのありがたみと、歴史を直視する責任を強く感じました。

模擬国連では、中国大使として「難民受け入れは最小限にし、国際機関を通じた他国支援を行う」という難しい立場を担いました。当初は具体的な拠出金などのデータ不足により、他国の質問に答えられず、自身の準備不足を痛感し立ち尽くす場面もありました。しかし、1日目の夜に戦略を立て直し、2日目は「難民の受け入れは限定的だが、定住までの教育やインフラ支援は惜しまない」という自国のポリシーを明確に伝えることで、他国との合意を形成することができました。特に、パートナーに頼らず一人で交渉の輪に飛び込み、流暢ではない英語であっても「自分の言葉で伝え切る」ことができた瞬間は、これまでにない自己変容を実感しました。1月に長崎東で行う模擬国連では、今回得た反省をもとに、他国のニーズをより詳細に分析し、データに基づいたより高度な交渉に挑戦したいと考えています。



積極的に合意形成を図る生徒たち

・多角的に物事を見る力 高2 長谷川 明鐘

広島平和祈念資料館の展示で目にした、そびえ立つ、きのこ雲と、その下に小さく写る人々との対比は、原爆という暴力の理不尽さを何よりも雄弁に物語っていました。自由に考え、発言できることが許される現代に生きる私たちが、軍国主義に縛られていた当時の子供たちの分まで責任を持ち、この平和の尊さを次世代へ繋いでいかなければならないという強い使命感が芽生えました。

模擬国連においては、中国大使として「難民発生を未然に防ぐための停戦達成」を外交の柱に据えました。準備段階では、UNHCRへの拠出金の推移や国内の内政事情を精査しましたが、初日は具体的な数字を提示できず、抽象的な議論に留まってしまったことが最大の反省点です。しかし、2日目はその反省を活かし、他国が自国の背景（天然資源や経済制裁）に基づいてどのようなアプローチをしているかを注意深く観察し、自国の提案を調整する「対話の深まり」を経験で

きました。柏原先生の講義で学んだ、自国の利益を守りつつ他国を自分事として捉える難しさと、国際社会の複雑さは、私にとって非常に興味深い課題となりました。今回の経験で培った「多角的に物事を見る力」を武器に、1月の事後模擬国連ではより確固たる根拠に基づいた説得力のある交渉を目指します。

・具体化する力 高2 北村 はなこ

広島平和記念資料館の「抽象から具体へ」というストーリー構成は、私に大きな衝撃を与えました。数字や概論から入るのではなく、個人の物語から入ることで、言語の壁を越えて世界中の人々に原爆の恐ろしさが伝わっていることを肌で感じました。

この気づきは、模擬国連での私の姿勢を大きく変えました。これまでの私は「争いはやめよう」という、いわば理想を語るだけの抽象的な議論に終始していました。しかし、一国の利害を背負って交渉する現場では、理想だけでは世界は1ミリも動かないことを痛感しました。今回は2人のペアで1国を担当し、2人3脚で準備を進めましたが、「敵対国とは話さない」という事前の閉鎖的な考えを、パートナーの「話さないと何も変わらない」という言葉が打ち砕いてくれました。現在は仲が悪くとも、人類共通の課題である難民問題解決のためには、歩み寄り、具体的な支援金額や人員数を提示し合う「現実的な手段」が必要なのです。理想を語るだけで終わらせないために、背景にある複雑なバックグラウンドを知り、泥臭く調整を重ねる。この「具体化する力」こそが、SDGsをはじめとする現代社会の諸問題を解決するために不可欠な資質であると、身をもって学ぶことができました。

・高みを目指したい 高2 銭坪 歩花

広島のに降り立ち、広島平和記念資料館へ向かうタクシーの中で、運転手の方が「この『ピースロード』は、戦時中は滑走路にしようとしていたんですよ」と教えてくださいました。平和を冠する道に刻まれた戦争の記憶という皮肉な事実、研修の冒頭から強い衝撃を受けました。資料館の展示では、被爆した三人の少年の遺品や、お母さんを背負って帰る途中で力尽きた少年のエピソードなど、長崎以上に「個人の人生と家族の絆」にフォーカスしたストーリー展開に胸を締めつけられました。特に壁一面の人骨の写真を目にしたとき、その一人ひとりに名前があり、守るべき家族がいたのだという当たり前の事実、核兵器の非道さを「自分ごと」として再認識しました。

模擬国連では、ベネズエラ大使としてロシアとの協力関係の構築に挑みました。当初の非公式討議では、ロシア側の高度な論理と私の英語力不足により、議論を停滞させてしまう申し訳なさや「負けた」という感覚を味わいました。しかし、そこからが私の本当の学びの始まりでした。ロシアから離れた後、同じく孤立していたウクライナやオーストラリアに対し、教育政策の共通点を見出して「互いにフォロワー（賛同国）になろう」と自ら働きかけ、合意を勝ち取ることができました。

2日目にはパートナーの北村さんと戦略を練り直し、石油価格の引き下げと制裁緩和を交換条件にするという「実利に基づいた交渉」にも挑戦しました。結果として二つの決議案を通すことができ、英語力の壁をイラストや熱意で補いながら、国際交渉のダイナミズムを肌で感じることができました。英語力や意識の高い仲間との切磋琢磨は、自分の現在地を知ると同時に、「もっと高みを目指したい」という想いに火をつける、かけがえのない経験となりました。

③学びの成果

本研修は、被爆地・長崎の生徒が広島において国際会議のシミュレーション（模擬国連）に挑むという、極めて高い教育的負荷を伴う挑戦であった。生徒たちが国際社会の一員としての自覚を形成する上で、重要な研修となった。

下記に教育成果を3点にまとめる。

i) 知的能力の飛躍的伸長と「具体」への執着

生徒たちは、単なる平和への願いを越え、30億ドルという具体的な支援額や資源の供給といった「現実の政治・経済」の視点を獲得した。これは、本校が推進するWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）における「課題発見・解決力」の育成において、極めて高い到達点を示している。

ii) 自己効力感とグローバル・コミュニケーション能力

All English という厳しい環境下で、グランプリを含む主要な賞を受賞したことは、生徒たちの自己効力感を飛躍的に高めた。特に「他者との折衷案を見出す」という高度な交渉術を体得したことは、将来、国際社会でリーダーシップを発揮するための強固な土台となった。

iii) 平和教育の再定義と地域間連携の深化

広島・長崎の生徒が共に議論し、平和を「自分ごと (Personalization)」として捉え直したプロセスは、本研修の社会的意義を十分に体現している。

以上、高度な国際教養と英語力双方を獲得する、非常に有意義なプログラムとなった。

(5) 東京大学 探究スタディツアー

①本事業の概要

本探究スタディツアーは、デジタルアーカイブやAIを用いた平和発信の第一人者である、東京大学大学院の渡邊英徳教授の研究室を訪問し、生徒が取り組む探究活動の質的向上を図ることを目的とした。最先端のAI技術やデジタル基盤(Re:Earth等)をいかに社会実装し、風化する戦争の記憶を次世代へ繋ぐかという課題に対し、専門的知見からのフィードバックを得る貴重な機会となった。また、本研修は、舟入高校と合同で実施した。

【期日】令和7年10月9日(木)～10月10日(金)

【研修先・内容】

- ・東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 教授 渡邊 英徳 研究室：
探究活動の中間発表、渡邊教授および院生による技術レクチャーとワークショップ
- ・第五福竜丸展示館：ビキニ環礁での水爆実験による被曝被害の学習と、デジタル技術を用いた展示回収の可能性検討

②生徒の省察

・高2 相川 乃々

探究テーマ：AIのカラー化技術を活用した戦争記憶の継承と平和の推進

白黒写真をカラー化することで過去を身近に引き寄せる活動について、渡邊教授から「コンセプトの見直し」という本質的な指摘をいただきました。写真集の順序や配置一つにしても、作り手の意図が読み手にどう伝わるかという設計の重要性を学びました。また、これまではチーム内での作業に終始していましたが、ARやRe:Earthチームとの連携案が出たことで、多角的な発信のイメージがもてました。

同研究室では、インドの戦争や在日外国人被爆者の研究に触れ、日本の視点のみならず多国籍な視点で被爆を捉える必要性を痛感しました。特に渡邊先生の「結局は人間側に主導権がある」という言葉が深く心に残っています。AIを単なる効率化のツールとしてではなく、人間の感情や物語を吹き込むための「アシスタント」としてどう使いこなすか。技術の先にある人の思いを届けるための探究を、続けていきたいです。



渡邊先生への探究発表

・高2 西 拓真、藤本 峻雅

探究テーマ：Re:Earthを用いたデジタルアーカイブの構築と若年層への普及

私たちはWebGISプラットフォーム「Re:Earth」を用いて、平和遺構やカラー化写真を地図上にアーカイブ化する研究を発表しました。渡邊教授や院生の方々からは、技術的な改善点だけでなく、「見る側の視点」の欠如を鋭く指摘されました。ピンの色分けや画像の配置など、利用者が迷わないためのインターフェース設計こそが、情報を届けるための鍵であることを学びました。

また、ネット上に置くだけでは普及しないという現実に向け、「ワークショップの開催」という具体的なアクションプランをいただきました。対象者によって反応がどう違うかという検証（評価）のプロセスこそが探究の鉄則であると学び、手法を問い直すきっかけとなりました。さらに、在日韓国人の被爆者の足跡を辿るストーリーマップのワークショップを通じ、日本の加害的な部分など複雑な歴史背景を理解した上で取り組まなければ、真の平和発信はできないと思いました。今後は 8thWall を用いた 3D 実装など、より没入感のあるツールへと Re:Earth を進化させていきたいです。

・高2 雪澤 理世

探究テーマ：長崎の被爆遺構を 3D と AR 技術を用いて再現し、平和学習の機会を創出する

今回の研修を通じ、探究とは「結論を出すこと」ではなく「問いを磨き続ける過程」そのものであると感じました。

講評では、爆心地からの距離や方角の表示、音声やキャラクターによる臨場感の再現など、自分たちにはなかった発想を多く得られました。特に、被爆遺構を単なる「場所」ではなく、そこに生きていた「人」の存在（名前や生活）を浮かび上がる空間として AR 上に再現する提案は、原爆の記憶をより心に訴えかけるものにする大きなヒントとなりました。

また、SNS の発言を可視化するシステムを通じ、被災地からの距離が「意識の距離」に繋がっているという事実衝撃を受けました。デジタル技術は単なる再現手段ではなく、人の意識の距離を測定し、それを縮めるための武器にもなり得ます。AI やデジタルアーカイブの先にある、送り手の意図や伝えたいこと自体が本質であることを忘れず、長崎の記憶を世界へ繋ぐドアを、AR で創り上げたいと考えています。

・第五福竜丸展示館見学、生徒省察 高2 藤本 峻雅

第五福竜丸の訪問は、核の被害が広島・長崎に留まらないという厳然たる事実を私たちに突きつけました。焦げた船体や乗組員の日記を目の当たりにし、核実験の犠牲になった人々の苦しみが現在進行形であることを痛感しました。

参加した藤本から、汚染の広がりや「点」で示した展示手法を Re:Earth に活用する案が出るなど、自分たちの探究をもとに提案することができました。「二度と被爆者をつくりたくない」という願いは長崎と共通であることを感じました。

③学びの成果

本研修は、世界的に活躍する渡邊先生の最先端の研究に触れることで、生徒たちが抱いていた「探究」の概念を根底から揺さぶり、再構築させる極めて密度の高いものとなった。その学習成果について、下記3点にまとめる。

i) 専門的フィードバックによる探究の質的向上

渡邊教授や院生からの指摘を受け、生徒たちは「作って満足する」段階から「利用者の視点に立ち、社会にどう普及・検証するか」という、研究者としての基礎的かつ重要なフェーズへと移行した。

ii) 多角的・批判的視点の獲得

海外の戦争や在日外国人の被爆といった、従来の学校教育では見落とされがちな多角的な視点に触れた。これにより、生徒たちの平和へのアプローチに「多文化共生」や「歴史的誠実さ」という厚みが加わった。

iii) テクノロジーと人間性の統合

AI を万能視するのではなく、あくまで「人間の主導権」の下でどう活用するかという哲学的な洞察を得た。これは、今後の AI 共生社会を生きる生徒たちにとって、平和教育の枠を超えた汎用的な資質能力の育成に繋がる。

生徒たちが得た刺激を校内外に還元し、戦後 80 年を象徴するような革新的な平和探究へと昇華させていくことを確信している。本事業で得た「知的探究への情熱」という種が、未来の社会に大きな価値を創出することに期待したい。

(6) 国連大学・世界銀行 探究スタディツアー

①本事業の概要

本研修は、世界の知の拠点である「国連大学 (UNU)」および国際金融機関である「世界銀行 (World Bank)」を訪問し、生徒が取り組む探究活動を英語でプレゼンテーションするとともに、専門家からの講評を通じて「持続可能性」や「ユニバーサルデザイン」といったグローバルな評価指標を学ぶことを目的とした。各国の課題解決に携わる実務家との対話を通じ、自らの提言が国際社会でいかに機能し得るかを検証する、本校 WWL 事業の最高点に値する研修である。

【日時】令和8年1月20日(火)～1月21日(水)

【研修先・内容】

- ・国連大学 (UNU)：英語による探究成果発表、研究員との質疑応答および専門的助言の受領
- ・世界銀行 東京事務所：開発途上国支援と貧困削減に関するレクチャー、持続可能な支援の在り方に関する協議
- ・個別自主研修：各チームのテーマに即した行政機関・専門施設（東京都デジタルサービス局、夢の島熱帯植物園、東京大空襲・戦災資料センター等）での実地調査

②生徒の省察

・高2 井手 清馬

探究テーマ：『子育て手帳』で子育てにおけるジェンダー平等を実現する

私は、従来の母子手帳・父子手帳を統合した「子育て手帳」によるジェンダー平等の実現について発表しました。国連大学の研究員の方々からは、「AIによる多言語対応」や「読み上げ機能」の追加をご提案いただき、私の構想に欠けていた「誰ひとり取り残さない」というSDGsの中核理念の重要性を痛感しました。

異性愛者のカップルだけでなく、LGBTQや多様なパートナーシップを

持つすべての人にとって使いやすい、真のユニバーサルデザインを追求する必要性に気づかされました。

世界銀行では、支援の持続性について厳しい指摘を受けました。ジェンダー問題は一朝一夕に解決するものではなく、長期的な視点での設計が不可欠です。

自主研修で訪問した東京都デジタルサービス局や GovTech 東京では、実際のアプリ開発における情報の等量性や結果を意識した意見の取舍選択のプロセスを学び、私の提案を単なる理想から「実装可能な社会システム」へと高めるための具体的な手法を学ぶことができました。「結果」にコミットする視点を持って、実装に向けた実証を重ねていきます。



国連大学での探究発表

・高2 内村 心花

探究テーマ：マイクロトマトの特性を活用したホンジュラスの子どもたちの栄養改善

ホンジュラスにおける児童の栄養問題をマイクロトマトの普及で解決する提案を行いました。国連大学での英語発表を通じ、研究員の方々からの「誰でも、どこでも、簡単に育てられるか」という問いが、開発途上国支援の本質であることを学びました。外部からの支援が終わった後も、現地の人々が自らの手で栽培を続けられる持続性こそが真の解決策であることを確認し、帰着後すぐに探究内容を「人々の自立」を主眼に置いたものへ修正しました。

世界銀行のレクチャーでは、貧困と栄養不良の密接な関係を学び、将来グローバルに活躍してこの連鎖を断ち切りたいという夢が明確になりました。自主研修の夢の島熱帯植物園では、高温多湿な環境下での植物の生命力を肌で感じ、マイクロトマトがホンジュラスの気候において「生食」という新たな文化として受け入れられる可能性を確信しました。机上の空論ではなく、人々の未来の暮らしまでを想像して活動することの大切さを学んだ、大変充実した研修となりました。

・高2 入江 愛夏

探究テーマ：長崎の被爆遺構を3DとAR技術を用いて再現し、平和学習の機会を創出する

私は、AR・3D技術を用いて世界中のどこからでも長崎の原爆被害を体験できるコンテンツを提案しました。英語での発表は想いを直接伝えられる喜びがあった一方、質疑応答での「体験した後、人がどう変わるのか（行動変容）」という問

いに対し、明確な根拠を示せなかったことが最大の学びとなりました。歴史を伝えることはあくまで手段であり、その体験が人々の平和への具体的な行動をどう促すのか、そこが不十分であったことを痛感しました。

自主研修での東京大空襲戦災資料センター訪問では、音声ガイド等のバリアフリーな工夫に触れるとともに、アクセスの良さが必ずしも来館者数に結び付かない現状を知りました。だからこそ、AR技術等を用いて「場所の制約」を取り払う意義を再確認できました。今後は、単なる情報の提供に留まらず、体験者の心にどのような変容を促すのかという教育効果があるかどうかを重視して、さらに探究を深めていきたいです。

・高2 本田 稀乃

探究テーマ：AIのカラー化技術を活用した戦争記憶の継承と平和の推進

「戦前の日常写真をカラー化し、平和を自分ごととして捉える」というテーマで発表しました。英語での質疑応答では、自分の意図を簡潔に説明することの難しさに直面しましたが、国連の연구원の方からいただいた「制作途中の段階をウェブで公開し、オンラインで被爆者との対話の場を創ってはどうか」という助言が、私の探究の視界を大きく広げてくれました。これまでは完成した写真集という結果のみを重視していましたが、制作過程そのものを対話のツールとして活用する「世界基準」の平和発信の方法に気づくことができました。

また、世界銀行でのレクチャーや東京大空襲戦災資料センターでの研修を通じ、悲劇の歴史を未来への教訓としてどう繋ぐかという姿勢を学びました。報復の連鎖を断ち切るために、過去の記憶をいかに効果的に、かつ対話的に伝えていくか。チームの仲間と協力し、今回学んだことを反映させて探究を続けていきます。

③学びの成果

本研修は、本校が掲げるグローバル・リーダー育成の頂点とも言える、国連大学また国際金融機関での直接対話を実現した。英語を単なる教科としてではなく、自らの思想を社会に実装するための「武器」として活用した生徒たちの姿は、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）拠点校が目指す教育成果の極めて象徴的な姿である。

特筆すべき成果について、下記3点にまとめる。

i) 国際基準による論理的妥当性の検証

国連大学や世界銀行という、多文化・多国籍な背景を持つ専門家からの評価を受けたことで、生徒たちの視座は「国内・教室内」から「グローバル・社会実装」へと明確に転換した。特に「誰ひとり取り残さない」「持続可能性」というキーワードを、自らの探究課題に具体的に落とし込む力を得たことは、大きな成果である。

ii) 自己表現力とレジリエンスの向上

原稿に頼らず、英語で「自分事」としてプレゼンテーションを行うという高い要求に対し、生徒たちはリハーサルと修正を重ねて応えた。質疑応答での「答えられなかった悔しさ」は、さらなる学習動機（海外研修参加や探究の深化への意欲）へと昇華されており、知的レジリエンス（折れない心）の成長が顕著に見られた。

iii) 主体的なフィールドワークによる多角的な洞察

自主研修において、自らのテーマに直結する中央省庁や専門機関をアポイントメントから含めて能動的に訪問し、実務家から直接指導を受けた経験は、キャリア教育の観点からも極めて価値が高い。

本事業を通じ、生徒たちは「平和」や「開発」を抽象的な理想としてではなく、緻密な設計と対話を必要とする「実務」として捉え直した。この経験は、将来彼らが国際社会の第一線で活躍するための確固たる原体験となった。

(7)三菱重工総合研究所 探究スタディツアー

①本事業の概要

本事業は、令和7年度三菱みらい育成財団「心のエンジンを駆動させる教育プログラム」の一環として実施したものであり、講演会およびそれを踏まえた施設見学・研究所員とのワークショップを通して、生徒が脱炭素社会に関する高度な知見を獲得し、今後の探究活動を深化させることを目的としたものである。

まず、令和7年10月23日(木)に、本校探究ルームにおいて、三菱重工業株式会社 エナジードメイン シニアエキスパート 石瀬史朗氏を講師に迎え、対面形式による講演会を実施した。講演では、「長崎カーボンニュートラル」を主題とし、世界的な環境課題としての脱炭素の意義、脱炭素化技術の具体的な取組事例、さらには長崎造船所および総合研究所が果たす役割について、技術・経済・社会の視点を横断しながら解説がなされた。技術紹介にとどまらず、エネルギートランジションが社会全体に与える影響や、実装に伴う現実的課題にも言及され、生徒にとって探究活動の基盤となる高度な教養を身に付ける機会となった。

続いて、講演内容との連続性を重視し、令和7年11月6日(木)には、三菱重工業総合研究所(長崎地区)においてフィールドワークを実施した。参加生徒40名が研究施設の見学を行い、最先端の研究開発の現場を実際に体感した後、「ゼロカーボンのために、私たちができること」をテーマとするワークショップを行った。ワークショップでは、生徒5名と研究所員1名による混成チームを編成し、カーボンニュートラル、クリーンエネルギー、水素・アンモニア利用、CCUS、循環経済、地域脱炭素化など8つのテーマに分かれて議論を深めた。研究者と直接対話しながら課題設定や解決策を検討する経験は、生徒にとって極めて実践的かつ探究的な学びの場となった。

② 生徒の省察(代表)

・高2 河野 恵耀 参加テーマ:循環経済

今回の三菱重工での研修を通して、環境問題に対する自分の見方が大きく変わりました。特に印象に残ったのは、三菱重工が空気中のCO₂の回収から運搬、処理までを一貫して担っているという点です。中でも、CO₂を吸収するために用いられる「アミン吸収液」は非常に興味深いものでした。見た目は透明で水とほとんど変わらないにもかかわらず、二酸化炭素を入れると容器が大きく凹むほど吸収する様子を実験で見、その性能に強い衝撃を受けました。



研究所員とのワークショップ

この技術を全国に展開できれば大きな効果があるのではないかと考え、都道府県ごとに設置した場合の回収量について質問しました。しかし、実際には処理スペースやコスト、安定性といった課題があり、理論上可能でも現実的には難しいという説明を受けました。この経験から、環境技術は性能だけでなく、社会実装まで含めて考えなければならないということを学びました。

また、循環経済をテーマとしたワークショップでは、「人の心を動かす」ことを重視したアイデアとして、投票型のごみ箱を用いた仕組みを提案しました。研究所員の方からは、自由な発想を尊重しつつも、「反対の立場からみるとどうか」「実装するとしたらどこが課題になるか」といった本質的な問いを多く投げかけていただきました。その中で、自分自身が問い続ける姿勢の大切さを強く実感しました。

学年を越えた議論や専門家との対話を通して、考えを深め、他者に伝える力の重要性も学ぶことができました。今回得た分析力や論理的思考力は、今後の探究活動に必ず生かせるものであり、非常に充実した研修だったと感じています。

・高2 城門 礼翔 参加テーマ:CCUS

今回のフィールドワークで特に印象に残ったのは、水素エネルギーやCCUSに関する説明の中で、研究所員の方がどのような質問にも淀みなく答えてくださったことです。私は、水から水素を得る際に不純物をどのように処理するのかという質問をしましたが、その場ですぐに明確な回答が返ってきました。その姿から、この分野を深く理解し、日々研究を積み重ねているからこそできる対応なのだと感じ、強い尊敬の念を抱きました。

CCUS について議論する中で、私はこの技術が抱える最大の課題は「資金」と「社会的認知度」であると考えました。直接的な利益が見えにくいため支援が集まりにくい現状に対し、広告を活用して認知度向上と資金確保を同時に行うという案を提案しました。環境技術を広めるには、技術そのものだけでなく、社会とのつながり方を工夫する必要があることを実感しました。

また、班内での発表を通して、自分の準備不足を痛感する場面もありました。具体的なデータや実行計画を伴った発表を聞き、自分の考えがいかに浅かったかを思い知らされ、恥ずかしさと同時に大きな学びを得ました。全体発表で紹介された投票型ごみ箱のアイデアも、細部の課題はあるものの、発想の新しさに刺激を受けました。

このワークショップを通して、自分の考えの甘さを知ると同時に、より深く考えるための視点を得ることができました。結果として、この研修には非常に満足しており、今後の探究に向けての大きな糧になったと感じています。

・高1 町田 隆輝 参加テーマ：省エネと電化

今回の研修では、専門家の方から直接話を聞き、自分の考えを伝えながら議論できたことがとても貴重な経験でした。CO₂回収については、吸収液を用いて回収し、その後老朽化した油田に注入することで再利用できるという話を聞き、環境対策と資源活用が結びついている点に持続可能性を感じました。一方で、コストの問題から普及が進んでいない現状を知り、理想と現実の間にある壁の大きさも実感しました。

省エネと電化のテーマでは、AI が温度や湿度を分析してエネルギー使用を最適化する技術について学びました。しかし、その AI 自体が大量の電力を消費しているという話を聞き、大きな衝撃を受けました。技術があるだけでは不十分で、その背景にあるエネルギー消費まで考える必要があるという新たな視点を得ることができました。

研究員の方からは、再生可能エネルギーを導入するには多額の費用がかかること、さらに電力会社などに「買ってもらえる仕組み」を考えることが重要だという指摘を受けました。これは、これまでの自分にはなかった考え方であり、社会の中で技術をどう生かすかを考える大切さを学びました。

このワークショップを通して、自分の視野が大きく広がり、探究活動への意欲も高まりました。今後は、今回得た視点を生かし、より現実的で深い探究を行っていきたいと思います。

・高1 森 瑛太 参加テーマ：アンモニア燃焼

三菱重工総合研究所の見学では、アンモニアを蓄える巨大なタンクや大規模な設備を実際に目にし、そのスケールの大きさに圧倒されました。クリーンエネルギーをテーマとした調査では、日本は資源が少ない国だからこそ、再生可能エネルギーを中心としたエネルギー構成を考えていく必要があると学びました。

ワークショップでは、三菱重工の方と生徒 5 人の計 6 人で議論を行い、事前に調べてきた課題や解決策を一人ずつ発表しました。周囲の発表はどれも分かりやすく、私も理解しやすかったですし、自分自身も準備してきた内容をしっかり発表できたことがうれしかったです。一人ひとりが役割を果たすことで、全体が成り立つということを実感しました。

研究所員の方の説明は難しい内容も多かったですが、このような機会はめったにないと思い、全力で理解しようと努力し、質疑応答にも積極的に参加しました。今回の体験は、これからの探究活動だけでなく、将来社会で生きていくうえでも大きな学びになると感じています。この貴重な経験を忘れず、今後に生かしていきたいです。

③学びの成果

本研修は、講演会により理論的・俯瞰的な視点を獲得し、フィールドワークおよびワークショップにおいては、研究者との対話を通して、技術、経済、政策、地域特性が相互に関係し合う構造を実感する学びが実現した。

特に、技術的な正しさだけでは社会は動かないという点、コストや市場、受容性を含めて課題を設計する必要があるという認識は、生徒の探究活動を一段階高次のものへと引き上げる示唆を与えた。また、地域である長崎の特性を生かした脱炭素の可能性に目を向けることで、グローバルな課題とローカルな実践を結び付けて考える姿勢が育まれた。

今後の探究活動における問いの質を高め、学術的かつ実践的な探究へと発展させる重要な起点となった。

4 事業全体の総括 問いを生きる一学びを世界へひらく

被爆地・長崎で育った生徒たちは、自分と、自分を取り巻く世界との間で「問い」を見つけ、その「問い」の解を目指し、本プログラムのなかで、国際会議、探究全国大会への参加、また国内外の探究スタディツアーという、多層的な「学びの現場」に身を投じてきました。本事業の最大の成果は、その過程のなかで、生徒たちが平和や社会課題を「知識」としてではなく、自らの手で「構築すべき対象」として捉え直したことにあります。

国際会議で世界の多様性に触れ、全国大会で自らの論理を磨き、そしてスタディツアーで現実の壁と可能性に直面する。このサイクルを繰り返すことで、生徒たちは「理想を語る情熱」と「現実を動かす戦略」を併せ持つリーダーへと成長しています。特に、英語での交渉力やデジタル技術の社会実装、さらには「誰ひとり取り残さない」という倫理観に基づいた政策提言など、本校が掲げるグローバル・リーダーの資質を体現する多くの事例が生まれました。

本事業の実現は、多大なるご支援を賜りました三菱みらい育成財団の皆様、公益財団法人長崎東同窓会奨学会の皆様、ならびに研修を快くお引き受けいただいた東京大学渡邊研究室、国連大学、世界銀行をはじめとした各関係機関の皆様、本校の認定協力校である広島市立舟入高等学校をはじめ連携校の皆様のご協力なくしては、あり得ませんでした。

現地で生徒たちに注がれた専門家の方々の温かくも厳しい眼差し、そして被爆者や実務家の皆様からの生きた言葉は、教室の中だけでは決して得ることのできない、生涯の財産となる学びとなりました。

生徒たちは今、研修で得た知見を「自分たちだけのもの」に留めることなく、探究発表会や研修報告会、校外での各種大会への参加、国連本部での探究発表など、世界への発信を通じて、広く還元し始めています。一つの問いが解決すれば、また新たな問いが生まれる。この終わりなき探究のプロセスこそが、持続可能な平和を創り出す唯一の道であると私たちは信じています。

本事業を支えてくださいましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

本事業の教育プログラムは今後も充実化を推進し、その探究モデルの汎用性と普及を図りながら、「ともによき世を創る」未来共創リーダーの育成を果たしていく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

令和8年2月4日

長崎県立長崎東高等学校
WWL 探究推進室長
三菱みらい育成財団教育プログラム担当

教諭 鳥居 正洋